

2019年（会報第27号）

山行記録



新津ハイキングクラブ

■ 表紙について

表紙は会山行「コース 13 大台ヶ原山と飛鳥巡り」の大台ヶ原山でのスナップショットです。山行日は快晴の登山日和となり、日出ガ岳山頂 1,695m を下り正木ヶ原では気持ちよく大回廊をかつ歩きました。そこはイトザサの平原と倒れたまた立枯れしたトウヒの木々が織りなしている景色で大台ヶ原を象徴する風景を作り出していました。

■ 平標山山頂の草原のような広がりについて

初めて平標山に登った時に、山頂から仙ノ倉山へかけての草原のような広がりが印象に残り調べてみました。

山と溪谷社の新・分県登山ガイドには、“山名の「標」は印であり、境を表す古語とのこと。境であり、峠である。平坦な頂上と合わせて、まさに言い得ている。”と解説されているのですが「草原のような広がり」ができた訳には触れていません。

そこで調べてみたら、地理院ホームページで“氷河・周氷河作用による地形/化石構造土/平標山”が見つかりました、これを手掛かりに素人の私が思い付いた事を書いてみます(失笑OK)。

“化石構造土は最終氷河期に高山帯のような寒冷地で大地に含まれる水分の凍結と移動により形成され、現在もその形態を残す構造土”との説明が見つかりました。この頃の平標山の森林限界は現在よりも低く、森林限界の上は永久凍土で覆われていたと思われます。こんなところで関東ローム帯で起きる霜柱現象のような現象が初冬におきると、霜柱で持ち上げられた地中の水・砂・石などはそのまま地表面で凍り付きます。春になり地表面から溶け始めるのですが、地表の下は永久凍土です

から浸み込んでいかない。地表に取り残された土石水は斜面を下り、滞留できるところで溜まって、現在の山頂付近で見られる草原のようななだらかな斜面を作ったのではないかと思います。



出典：地理院ホームページ

(1676)Y/Y

発行日：2019年(平成31年)2月2日

編集者：広報(1322)N/S、(1448)Y/O、(1571)K/T、(1606)K/H、(1676)Y/Y

発行団体名：新津ハイキングクラブ <http://niitsuhc.jp>